脚本家早坂暁氏と行く
坊ちゃん発売100周年の松山と
原爆投下61年目の広島の記憶を巡るツアー
2006年８月５日（土）・６日（日）

早坂暁氏　プロフィール

1929 年、愛媛県北条市生まれ。芸術選奨文部大臣賞、放送文化賞、新田次郎文化賞など数々の受賞暦を持つ。平成 6 年紫授褒賞受賞。脚本に「夢千代日記」「花へんろ」「きけ、わだつみの声」「千年の恋」原爆映画「夏少女」。小説に「ダウンタウンヒーローズ」「華日記」、エッセイに「公園通りの猫たち」など数多くの作品がある。

「HIROSHIMA」が語ること

原爆が投下されて６１年目の８月６日、広島を巡礼した。「HIROSHIMA」その言葉の響きの中に、世界平和への大きな祈りが響く。世界で初めて原爆が投下された街・広島。平坦で気ぜわしい毎日を過ごしていると、この生活の根幹が平和であることで裏打ちされていることさえ忘れている。ましてや生まれた時から、空気のように平和を呼吸している戦後生まれの私たちにとって、平和であることの大切さや有り難さは希薄なのかもしれない。更に、戦後から 61 年の歳月が流れ、戦争体験者が次々に世代交代し、語り継ぐことの難しさが刻々と難しくなっていく。体験していないことを語り継ぐことの限界があることは分っているが、聞いていないことは思い出すことができない。戦争とは何かを語り継ぎ、聞いておくことのタイムリミットが目前に迫っている。そして、北朝鮮の原爆実験が強行された。原爆投下の脅威は、消え去ったわけではない、今もなお世界のどこかでその火種が燻っている。６１年前に原爆は広島上空で炸裂したが、次は何処か、自分の頭上かもしれない・・・。犠牲者になった人々の慰霊は、二度と同じ過ちを繰り返さないで欲しいということに尽きるだろう。８月６日「HIROSHIMA」には深い鎮魂と悲痛な平和への祈りが続いていた。

夏少女　そして、早坂先生との出会い

原爆が投下された８月６日に広島を歩く。熟塾でも 2000 年８月に、終戦 55 年記念で映画夏少女の自主上映会を行った。夢千代日記の脚本家　早坂暁先生を大阪にお呼びして講演会と芋の蔓がメインディッシュの終戦弁当を記者発表し、800 食を販売した。夏休みに親子やおばあちゃんやおじいちゃんと一緒に来てくれる子供たちの姿もあった。熟塾という T シャツを着て、それこそ汗だくで熟塾初めての単独主催イベントを敢行した。上映前の６月には塾生の鍛冶さんと一緒に映画のプロデューサーを広島に訪ね、平和記念館や原爆ドームを目と心に焼き付けた。エル大阪を貸切、千人動員が採算分岐点である大掛かりなイベントを為し得る目途があって、着手したイベントではなかった。もともと机の中で眠っていた、前から暖めていた企画だった。その原点には「夢千代」を書き上げた早坂先生に会いたい！という思いがあった。しかし、原爆ドームの前に立って、改めて自分たちが主催するイベントの持つ意味の大きさを痛感した。ヒロシマという世界的な大きな意味、沢山の人々の断末魔の叫びの中にある戦争の悲惨さ、饒舌に尽くしがたい思いが胸を締め付けた。蟻のような小さな市民グループが抱えるには大きすぎるテーマを翳してしまったのだ。もう後戻りはできない！窮鼠が猫に襲いかかるように終戦弁当企画を搾り出し、記者発表し、協賛企業や、手話サークルや映画の字幕サークルと輪が広がっていった。結果、協力企業なども含め 2000 枚のチケットが捌け、当日の動員は 1600 名を数えた。仕事の合間を縫って何だか死に物狂いでヒロシマに体当たりした企画だった。当日まで３日徹夜してチケットを郵送し関係者に連絡し段取りを考えた。最後の作業は舞台での自分の挨拶。耳の不自由な方の為に字幕が入るので、パソコンに打ち込んでそのデーターを持って会場に駆け込んだ。

あの暑い日から、６年目に初めて原爆投下当日の８月６日のヒロシマにいた。それも早坂暁先生とご一緒だった。その後、早坂先生が脚本を手掛けた源氏物語を映画化した「千年の恋」について、奈良大学の雅楽研究会の学生さんの協力を得て、光源氏が幼い時に待った舞楽を披露いただき、光源氏が口にした餅菓子の元祖と言われている「椿餅」を特注した。更に、一心寺シアターで、早坂先生の作・演出で林隆三さん・英太郎さん、西崎緑さんに、烏丸節子さんらが出演した歌謡ミュージカル「牡丹燈籠狂騒曲」では塾生もキョンシー役で舞台へ。何だか真夏の夜の夢のような大騒ぎだった。夢のようだが、夢ではなく、それは熟塾の活動の足跡になっている。

道後温泉経由広島へ

そして、「今年の８月６日は日曜日かぁ、原爆投下直後の記憶を探す為に広島に行きたいなぁ」と思って講座企画の一環として、ふらっと早坂先生にお電話してみた。その日は広島にいるとの事で、ならご一緒したいと希望を告げのが、５月頃だった。ある日、帰宅して留守番電話を確認すると「東京の早坂です。」とメッセージが残っていた。珍しい先生からの電話で、慌てて電話を入れる。「広島に来るの？」との問いに「ハイ」と答えた。もし広島に行くのなら前日に入って、呉の戦艦ヤマト記念館などを回ろうかとも考えていたが・・・、「広島の宿は随分前から予約取れないし、ぼくねぇ。前日は道後温泉居るの」との予想外の地名。「道後温泉？！」道後温泉経由広島！道後温泉のある松山観光港から広島港まで１時間で高速船が運航しているとのこと。先生は朝６時発があるとおっしゃったが、どう時間表で調べても朝一番の広島行きは、午前７時が始発なのだ。でも先生は朝６時発のがあるからと何度も力説されるので６時発の広島行きがあるのだと考えることにした。新幹線から１時間半でたどり着く広島に道後温泉に一泊して、更に翌朝６時の高速船に乗り込むには夜逃げのように４時に起床して、５時に旅館をこっそり出ていかなくてはなら

ない。こんなハードなスケジュールのツアーに誰が参加するのかと戸惑ったが、まぁ、一期一会の広島原爆投下から６１年前の広島。それも、夢千代日記の脚本家の早坂先生と一緒に巡礼できるなんて・・・。その価値に共感し、時間的にも、経済的にも同行できる人が何人いるかなぁと思いながら、八月の企画として敢行する事に決定。

皆勤賞狙いの杉山さんこと“杉爺”が早坂先生の著書「戦艦大和」を読破して、一番に名乗りを揚げた。あと、３年前に入塾ただいた中島さんと奥様に、四国の出張にかけて土曜日の松山のみ同行するという田中捻三氏の３名と、早坂先生の終戦５５年目の夏少女の講演会のビデオに手話通訳を編集してくださった本田さんと奥様。そして、田辺大根に田辺に模擬爆弾が落ちたなど、地元の郷土史や町おこしに奔走されているラジオ大阪の吉村さんが加わって、七人が早坂先生と連れ立ってのグループ旅行となった。

トイレ前に鎮座する「漱石　坊ちゃんの碑」

本田さんと中島さん夫妻に私は、８月４日金曜日に松山に入り、道後温泉のお湯をゆっくりと楽しんだ。
８月５日、杉山さんと吉村さん、田中さんが、昼前に松山着、道後温泉前に集合した。空には入道雲、正に夏本番の日差しが眩しかった。挨拶もそこそこに、先ずは「昼食」と、魚の定食が美味しい道後温泉の前の店に入りオコゼの唐揚げにかぶりついた。

一息ついて、私はNHKテレビのニュースでみた、早坂先生の筆による『坊ちゃん発売１００年記念碑』が見たいというと、ちょうど道後温泉の裏手だけどと沈んだ声。

この裏ですかと回ると整備中の公園の黒壁の小屋の前にずしりとした黒い石碑が建っていた。早坂先生の角がなくて丸い文字で『漱石　坊ちゃんの碑　早坂暁』原稿用紙の上には、『坊ちゃん　親譲りの無鉄砲で、子供の頃から損ばかりをしているの･･･』冒頭の数行と、夏目漱石の肖像が刻まれていた。記念写真を撮るときは、ちょっとニッコリした早坂先生だが、「この後ろの建物、なんだと思う。トイレだよ、便所の前に建てるっていうんだったら、僕書かなかったよ。夏目漱石さんに失礼でしょう！夏目漱石さんは松山観光にどれだけ貢献した事か、漱石さんに敬意がない。松山観光の恩人のような漱石さんの写真を便所と並べるなんて・・・」テレビの映像で見たときに後ろの黒い小屋がトイレとは気がつかなかったが・・・。床の間とはいわないが、記念碑を便所と並べるとはの失礼千万説には頷けた。

衛門三郎の里での講演会

ホテルに戻って、午後からの松山散策の足にジャンボタクシーを呼んだ。タクシーに乗り込んでから、一体何処に行くのかと聞くと、「任せなさい」の一言。四国遍路は先生の十八番で、NHK のﾃﾚﾋﾞﾄﾞﾗﾏ「昭和花遍路」は楽しみだった。先生の実家は松山の隣町、広島の対岸ともいえる北条という海に面した町の遍路道に面した大きな雑貨店、町の百貨店のような商家を開いていた。そこで見聞きした少年の目を通してみた大家族の人間模様を描いた作品だった。「何処へ行くのやら･･･」と車は先生が指示した場所へと向かう。
途中、第５１番札所の石手寺の前を通ると、土下座する男の姿があった。先生が、弘法大師を追い求めるお遍路さんのルーツと伝えられる衛門三郎だという。「任せなさい」の一点張りに、手綱を握られた驢馬のようにポコポコとついていくしかない。ここは四国、先生の故郷、東西南北もわからぬまま、車は山道を行く。そしてたどりついたのが、第 47 番札所八坂寺への入口にあるギャラリーで、大屋根を持つプレハブ作りの**「光明婆塞　衛門三郎の里」(松山市浄瑠璃町甲 511 番地　089-963-5040)**だった。

先生の「さぁ、ここで降りて」の言葉に促され、先生を先頭に入り口を入ると拍手に包まれ、尺八の演奏が始まった。ギャラリーの中には三十人程の村人がいて、周囲の壁にはいくつかの額縁が並んでいたが、それらは先生の筆によるものだった。どうもこのギャラリーで先生の書と講演会が予定されていたようで、それも予定開演時間は１時で、私たちがオコゼなどに齧り付いてゆっくり昼食をとっていたので、予定よりも１時間も遅い２時に到着してしまったようだ。
「先生、なんで１時から講演会が始まるって言ってくださらなかったのですか・・・」と恐縮して小声で言うと、「だって、大阪からの後発部隊が到着するのが１２時だって言うから・・・」急がせてはいけないという先生の配慮で講演が１時からと敢えて私たちに告げなかったのか、とにかく旅人のスケジュールに合わせていただき、１時間開演時間が遅くなった。いつ来るか判らぬお遍路さんを持て成すお接待に慣れている遍路道の村人とは言え、１時間も講師が現れないなんて、それをゆっくりと待って下さるなんて、ここは四国、穏やかな瀬戸内の海に対比するかのようにのんびりと穏やか時間が流れている。近所の方々らしい寄り合い場の様な雰囲気の中に大阪組が加わって、尺八の演奏家が一曲吹き終えるのを待って早坂先生の講演が始まった。

熟塾という大阪から来たグループの紹介から始まり、本題のお遍路さんへと繋がっていく。自分も同様に遍路道沿いの商家に生まれ育ったので、お遍路さんが歩いている姿は見慣れた風景だった。だいぶ大きくなるまで日本国中をお遍路さんが歩いていると思っていた。両親が従兄弟同士の為、生まれたときから虚弱体質で大きくなるまで育たないだろうと言われた。母は乳母車に私を乗せて遍路し、我

が子の無事の成長を祈ったという。遍路道はきつい坂道もあるので、道すがら人の手を借り、険しい山道では汗臭い男の人の腕に抱かれた遠い記憶がある。お遍路さんは街道沿いの人々のお接待や施しによって四国を巡る。無財の七施、一、眼施（がんぜ）：暖かいやさしいまなざしで人に接する。二、和顔施（わげんせ）：和やかな微笑みのある顔つきで人に接する。三、言辞施（ごんじせ）：思いやりのこもった暖かい言葉をかける。四、身施（しんせ）：礼儀正しいふるまいや身をもって奉仕を行う。五、心施（しんせ）：心のこもった思いやりの心で接すること。六、床座施（しょうざせ）寝床や座席を提供すること。七、房舎施（ぼうしゃせ）：家に迎えて休んでいただくこと。風や雨露をしのぐ所を与えること。自分が半身濡れながらも、相手に雨がかからないように傘を差し掛けるなどの思いやりをもって人に接することも施しであり、人の運命は分からぬもの、施している自分がまた苦しみを背負って遍路道を歩き、施しを受けるかもしれぬ。四国の人々は自分たちに代わって、お遍路さんが歩いているのだという。人生遍路、人と人とが相手の立場を気遣って生きていく思いやりが今求められているのではないか。

遍路のはじまり　弘法大師を追った衛門三郎

伊予国の荏原郷（えばらのさと）に衛門三郎という強欲な金持ちがいた。ある日、旅の僧が屋敷に托鉢にやってきたが、「乞食坊主にやる物などないから、さっさと出て行け」と怒鳴り散らして、追い出してしまった。翌日、また、同じ旅の僧が托鉢にやってきたので、怒って僧の持つ鉢を取って庭に叩きつけたので、鉄鉢が八つに割れ飛び散った。その僧は寂しげな顔をして屋敷から出て行った。ところが、翌日から、長者の家では、長者の八人の子供達、次々と病になり、一日に一人ずつ死んでしまい、八日経つと子供が皆息を引き取ってしまった。流石の衛門三郎もひどく悲しみ、声をあげて泣き叫んだ。その夜、夢枕に、あの旅の僧が現われ、『衛門三郎、総て悪行の報いなり。情け深き人となれ。』と告げた。夢から覚めて、あの方が弘法大師だったのかと気付き、今までの行いを深く悔いて、財産の総てを村人に与え、子供たちの八つの塚を作って供養した後、弘法大師に一目会って、懺悔すべきと決心して旅立だった。

伊予から讃岐へ、更に阿波、土佐を経て大師の後を追った。しかし、大師の姿がない。ただ、一言大師に詫びて死にたいと思って、四国の道を二十周まわったけれど、願いかなわず。二十一周目に、遂に阿波国の焼山寺門前で力尽き倒れ伏した時、意識朦朧の中に弘法大師が現れ、『衛門三郎、巡礼により、これまでの、汝の罪は解かれり。この世の最後に、望みあらば、申すがよい。』と言われたので、『来世は、国司の家にもう一度生まれかわりとうございます。』と応えた。大師が哀れに思い、「衛門三郎再来」と書きし、小さな石を左手に握らせると、その石をしっかりと握りしめ息絶えた。

明くる年に、伊予国司、河野息利（こうのやすとし）に男子が生まれた。不思議なことに、この男子は生まれた時から、左手を堅く握りしめていてどうしても開かなかった。心配した両親が安養寺という寺の僧に頼んで、大祈願を行うと、小さな手は自然に開き、「衛門三郎再来」と書かかれた小石出が出てきた。この男子は大きくなって立派な伊予国司になり、多くの人々から慕われた。この時から、寺の名を「石手寺」と改めたと伝えられている。

母の乳　もらいし後の　修羅の旅

講演後、展示されている先生の書を見て回ったが、私は**「母の乳　もらいし後の　修羅の旅」**の字を眺めているうちに、なんだか亡くなった母が恋しくて・・・。会社に入った頃、母と丸亀の親戚の病気見舞いに行き、道後温泉まで二人で足を伸ばし観光気分で「石手寺」を参拝したことがあった。そういえば61歳で急死する前の年あたりから、「お遍路さんに行きたいね。船で徳島に渡ると四国だからねぇ」一緒に行きたいそぶりで母親はなんども私に声をかけた。忙しさにかまけて、『いつかね』と心の中でつぶやきながらちゃんと返事をせぬまま、暑い夏の日、母は独りで逝ってしまった。それから十年、一昨年農村舞台見学ツアーの下見で徳島の一番札所霊山寺に足を踏み入れ、本堂の中で一塊のお遍路さんの団体に囲まれているうちに、ふと母と同年代の年恰好の人の後姿に、「嗚呼、ここは四国八十八箇所の一番札所、母が行きあいと言っていたお寺･･･、ごめんね。連れて行ってあげられなくて、一緒に来れなくて･･･」と手を合わせているうちに、お灯明が涙で揺らいで見えた。いつかお遍路に出かけられる余裕が出来れば、母の写真を懐に弘法大師さんと三人で回ってみたいと思っている。『いつかね。』と母の言葉に頷きながらあっという間の十年。まだ道に迷って、遍路道にも辿り着いていない私の修羅の旅。

館内では、お遍路さんにまつわる話や、広島の原爆、親友でもあった故渥美清さんの一周忌に寄せてや、渋谷の猫たちのことなど筆の向くままに書き綴られている昨年発行の早坂先生のエッセイ集**「へんろ曼荼羅」創風社出版**（1,800円）が販売さていたので、先生がサインをしていた。

ここは、お遍路の里であると共に金平狸が有名で、たぬきの里であるという。金平狸は、荏原の大宮八幡神社の境内に金森大明神（俗名：金平狸）として祭られている。この金平狸は読み書きソロバンに優れ、地元の人々を助け愛されていた。また弘法大師は、狐は利口すぎて具合が悪いと狸を好まれたそうで、金平狸は四国の横綱格のたぬきだそうで、狸の置物も展示販売されていた。

その後は、またまた何処に行こうと、風任せ。で誰かが砥部焼を買いたいというので、先生の知り合いの工房があるとのことで、車を走らす。山の中にはいくつもの工房が点在していた。タクシーの運転手さんもゆったりで、村の人にその道を何度も聞いていたはずなのに、迷子になった。同じ山道をまるで狸と戯れているかのようにくるくる巡った。先生も工房の名が思い出せない。頼みの先生の知り合いに電話したら、携帯電話の電池が切れて、肝心の工房の電話番号どころか、工房の名前さえも聞き出せなかった。

しかたなく、砥部焼観光センターに入ると、薫工房と連絡が取れた。迎えに行くのでといわれた間、館内を見学していたら、二階で中国の山西省生まれの画家で牛子葦という人の大作が壁を飾っていた。遍路道で人々を迎える寺院に引き寄せられて、松山に移り住んで八十八箇所の寺院をテーマに書き続けているという。薫工房の女主に先導されて何度か通った山道を通り、三叉路を直進。看板もない土壁作りのアトリエと民家が並んでいた。そこで車を降りて、作品を眺める。砥部焼独特の白い厚手の陶器ではなく、土臭い表情をした器が並べられていた。私は取っ手のねじれたマグカップと三本足の器と、ビアカップを購入。他のメンバーもカップやお気に入りの皿を購入し、やっと辿り着いた工房前で記念写真を撮った。静かに蝉が鳴いていた。

太陽は傾きかけていた。宿に戻って、お風呂に入り、小部屋を借りてお膳を前に 8 人が浴衣掛けで宴会。カラオケに興じた。広島行きの高速艇はやはり 7 時が始発。6 時にはホテルを出てということで、おにぎりとお茶を用意してもらうことにして、後は部屋に戻って消灯。

61 年前、頭上で原子爆弾が炸裂

翌朝は、5 時に目を覚まして温泉で身を清め、6 時にロビー集合。夜明け前の静かな空気に包まれ、またまたジャンボタクシーに乗って、松山観光港に向かう。夏の朝は夜明けが早い。7 時発の高速低は、晴れ渡った夏の空をバックに青い瀬戸内海を突っ走る。船内のテレビでは、すでに広島の原爆投下時間 8 時 15 分を前に早朝から慰霊碑にお参りする人々の姿を映し出す。広島港には 8 時着、タクシーでとりあえず原爆記念館を目指す。記念館の壁には広島市原爆死没者慰霊式・平和祈念式の文字が並び、屋上には何台ものテレビカメラが放列を組んで中継している。太陽が眩しく人々に降り注ぐ、61 年前にまさに仰ぎ見るこの頭上に爆撃機が飛来し、ピカドンが炸裂。一瞬にして広島の町を高炉の中に投げ入れたような惨状が展開した。正に空から原爆という悪魔が飛来し、多くの生贄が捧げられた。文明の利器が牙となって、人々に襲い掛かってきた。爆心地に多くの人が平和の祈りを捧げる。そして、今日一日、この頭上に降り注いだ原子爆弾が炸裂し爆心地を中心に、61 年前の広島の姿を向き合うことになる

被爆者が描いた絵を街角に返す会

原爆が広島に落とされてから55年。

残念ながら、原爆への思いの風化は、年ごとに深まって、今や原爆は過去の《記念物》に姿を変えつつある。

原爆の恐ろしさを再現し、体感してもらうしか、原爆廃絶への熱いエネルギーは生まれてこない。

今、8月6日のあの日の光景が、実に鮮やかに、衝撃的に描かれた絵が、実に二千数百枚も残されている。生き残った被爆者が、渾身の思いを込めて描いた《あの日の爆心地の光景》である。これこそ、被爆者の遺言ならぬ遺画であり、究極の報告書である。また、原爆の恐ろしい実相を、リアルに、克明に伝えるものは、この二千数百枚の絵しかない私たちは、今こそ、究極の絵を、その描かれた街角に返したいのだ。

・・・この川で　・・・この交差点で　・・・この坂道で　・・・この橋で、その日、あの時、どんな光景が展開したのか、その街角の痛恨の記憶として、痛恨の絵画をその街に返してみたい。爆心地のその場所に、今の街と重ね合わせるように、絵画の陶版を置いてみたいのだ。そうすることで、街角は、風化した55年の記憶を鮮やかにとりもどすことができる。

原爆が落ちた、あの日の街角を　”再現”、”思い出させる”こと以外に、 原爆の思いの風化を防ぐ方法はないのではないか。

あの日、あのとき、街角は、人々は、どんな姿だったのか、今の平和な街角に二重写しにするため、 少なくとも33ヵ所、できれば88ヵ所の爆心地に、鮮やかな陶版の絵を、その描かれた場所に建てたいのだ。

この原爆の街角の記憶を、世界の記憶として、いつまでも残すために・・・・・・記・2000年8月26日

熟塾が夏少女の上映と講演会を主催した日に､「被害者が描いた絵を街角に返す会」の会長として早坂先生はその思いを掲げている。広島の惨状を画用紙に書き留めて保管するだけでなく、陶板に焼きつけてその地で何があったのかを伝える街角の語り部として復活させようというものだ。被爆体験者の高齢化に伴って何らかの形でその脅威は伝えなければならない。先生持論の広島のお遍路絵碑。被爆者が見た広島の記憶を色あせることない陶板に焼き付け絵碑として 88 箇所に現場に返し巡礼し、あの日広島の街角のそこここで何があったのかに向き合い、戦争の意味を問い、犠牲者を慰霊し平和を祈ることに共感した。

直ぐに個人的に寄付した。気が付いたら、ホームページの呼びかけ人・賛同者リストに、新藤兼人監督や、高畑勲アニメ監督に、女優の吉永小百合さんらと並んで、原田彰子熟塾　代表と列記されていたが、何の宣伝材料にはならないのにと恐縮している。

第 1 号絵碑建立の西応寺で峠三吉墓参

8 月 6 日に実物の絵碑を巡礼し、広島のあの日に立ち戻りたい。少人数ながら、それが叶った。それも早坂先生と一緒だ。8 月 6 日日曜日。雲ひとつ無く晴れ渡る青い空から容赦ない夏の厳しい日差しが降り注ぐ。まず、平和公園南側の西応寺前で、会の事務局次長で元高校教師の土居克彦さんと、幹事で元地元新聞の記者であった町川範彦さんと落ち合う。広島の毎日会館の山手さんも現地で集合。日赤病院の方も加わって車 2 台で絵碑を巡礼することになる。

第 1 号絵碑は平和公園近くの西応寺門前に鎮座していた。2 枚 1 組の絵は、原爆投下直前に「エノラ・ゲイ」が飛来し、これを見上げる動員学徒の列と、もう 1 枚は倒壊した家屋の向こうに黒煙が上がり、逃げ惑う子供たちの惨状が生々しく描かれている。この西応寺は、爆心地から約 700 メートルの至近距離。この寺院には**反戦詩人　峠三吉**の

墓があるので、早坂先生を先頭にお参りにいく。28 歳で被爆し、原爆症に蝕まれた体を病床に置きながらも、1950 年アメリカのトルーマン大統領が朝鮮戦争で原爆使用を検討しているという声明を聞き、抗議をこめて翌年 1 月から 3 月まで「原爆詩集」25 編の内 18 編を書き上げ、その“序”として書かれた

「ちちをかえせ　ははをかえせ　としよりをかえせ
こどもをかえせ　わたしをかえせ
わたしにつながるにんげんをかえせ
にんげんのよのあるかぎり
くずれぬへいわを　へいわをかえせ」は碑文となり 1963 年に平和記念館の北側に建設された。

彼が筆をとった頃は原爆についての報道や訴えが管制がされていたころだった。更に「叙事詩広島」を執筆しようと決意し、手術に臨んだものの、体力的には命の壁を越えることができず 1953 年 3 月 10 日 38 歳の生涯を終えたという。

このお墓の下に眠る峠三吉氏はいまもペンを握り、反戦を、原爆への脅威を訴えているのだろうか。単純な言葉ながら、彼の詩を声に出して読んでみると、叫びとなって人の心に木霊するような大きさがある。きっと、あの日、地獄絵のような世界を目にした人々誰もが、叫んだのではないか。いや、今も叫び続けているような鮮烈な思いが、言葉の端々に託されている。

第 9 号絵碑前で作者の 61 年前の体験談を聞く

西応寺から、2 台の車に分乗し、次に丁度 1 年前の 8 月 6 日に除幕式が行われた広島赤十字・原爆病院前の公園の中にある**第 9 号絵碑**の前に辿り着いた。今回私たちが来るために、その絵を描いた河野きよみさんの姿があった。その碑に寄り添うように、体験談を聞く。8 月 6 日、広島の更に 60 年前は 14 歳だった。日赤に勤めていた姉の安否を訪ねて、母は姉の死を覚悟して骨を拾うつもりで藁を持って、二人で（白木村＝現広島市安佐北区＝から）広島へ向かった。矢賀駅から市内に入ると道にはむごいけが人の行列を見た。道路のいたるところに死体がころがっていていたので、足元の惨状を確認するように躓かないように母と一緒に歩いた。やっとたどり着いた日赤は生き地獄だった。コンクリートの床に血だらけの人がずらりと並んで「痛いよう」「殺して」「水を」 と口々に叫んだり呟いたりするのでその声が壁一杯に反響し、断末魔の不気味な声の合唱が響いていた。その中で先生の姿は一人、看護婦が数人忙しそうに働いていた。

姉は無事似の島に運ばれていたが、病院の玄関のソテツの花壇に中学生の死体が山積みされていた。制服は軍服と同じゲートル姿。建物疎開の後片付けに動員されたのだろうか、放射状に積み上げられどの遺体も不思議に無傷だった。積み上げられた遺体は随時荼毘にふされたようだったが、あの子たちは、両親に探し当ててもらっただろうか。もしかしたら、その両親も他の場所で息絶えていたかもしれない。自分と同い年のわずか 13，14 歳が一瞬で虫けらのように焼かれていく姿は忘れられなかった。絵を募集しているという事を聞いたある夜、あの積み上げられた少年たちが夢枕に立った。無言だったが、僕らのことを描いて伝えてほしいと訴えているようだった。息子が家に残していった小学校の時の絵の具の道具を取り出してきてあの日を思い出し涙を流しながら一気に描いた。

少年たちのことはどうにか描けたが、どうしても描けなかったことがあるという。病院に向かって歩いている途中に、黒焦げの市電が目に付いた。爆風で乗っていた人も椅子も機材も吹っ飛んだというのに、ふっと見上げると、炭化した人々の腕がつり革を荷握り締めたまま、わずかな風で揺れていたという。・・・その瞬間まで人々は市電に乗って学校へ行き、会社へ行き、現実を握り締めていた腕。日常を返せ。市民としてのささやかな幸せと・・・。怒りに、苦しみに、悲しみに震えるかのように、黒焦げの腕だけが渾身の力でつり革を、現実を握り締めていたという・・。何だか、目頭が熱くなった。61 年前に河野さんのまわりで起った現実が、人々の苦痛の声が、市電の中で揺れる黒焦げの腕が、すべて現実にこの地で起きたことなのだ。

太陽は容赦なく、夏の日差しを打ち付ける。ただでさえ、暑い夏の日の惨状にめまいが摺る思いだった。絵碑を囲んで記念写真を撮った。一年一年あの夏の日の記憶から遠ざかるが、北朝鮮の核実験など、核の脅威はひたひたとまた一般の人々の暮らしの上に暗い影を投げかけようとしている空気を感じているのは私だけではないだろう。HIROSHIMA の持つ意味は重い。

絵碑の作者川野さんを囲んで日赤病院前で記念写真を撮る。

早坂先生　原水禁の舞台の真ん中で平和を叫ぶ

車に乗って近所の中に車に乗って一旦街角に返す会のある YMCA の部屋に戻り荷物を置き、とにかく早坂先生は広島グリーン・アリナーに行き、挨拶しなくてはならないそうだ。ドーム型の会場で入り口を探す。大勢の人々がロビーに溢れ、ドアを開けると、アリーナーのフロアーそして観客席一杯に数千人がそれぞれの地区の旗を掲げ舞台に向けて視線を送っている。大集会に参加したことがない私はびっくり。観客が舞台に上がり発言したりと、1 日中へ広島

を通した平和についての宣言や講演が続くらしい。とにかく、早坂先生の挨拶は 12 時前後の 10 分となっていた。やっと空いている席に座ると、ちょっと行って来ると、舞台に向かわれた。数人でのパネルディスカッションが終わると、地域の旗を掲げた人たちが舞台に大移動、前に設けられた机に先生の姿を見つける。

頑張るぞと会場のみんなで気合をいれたところで、ブラジルの被爆者代表の挨拶に続き、早坂先生が「被爆体験者の高齢化により、次の世代への戦争についての語り伝えが難しくなっているが、絵碑の形で伝える形を継承している。平和であることの意味を深く考えるべき時代に来ている」と強調されていた。

広島への原爆投下の導火線　大阪の田辺の模擬爆弾

先生が席に戻ったのでまたカルガモのように YMCA まで徒歩で移動。様々のグループが広島で平和を考える集会を行っているようで、平和の礎となった多くの犠牲者の上に平和な日々を過ごさせていただいていることを改めて考えさせられた。YMCA の部屋で大阪組の挨拶をした。そして、今回、田辺に落された摸擬原爆について白髪交じりのヒゲが印象的な風貌の吉村さんが早坂先生に説明した。

　先生もご存知なかったが、広島への原爆投下までにアメリカは 7 月 20 日から日本各地で爆撃をしながらも、同型の模擬爆弾を使用しパイロットの原爆投下訓練を行っており、大阪の田辺にもその一発が落とされ犠牲者が出たという。　吉村さんはラジオ大阪記者で、大阪の田辺出身。地元の歴史探訪に取組み終戦６０年の 2005 年「7・ 26 田辺の模擬原爆追悼の集い」の実行委員として広島・長崎の原爆に続く、田辺に落とされた模擬原爆を通し戦争について地元の人々と共に考える活動をしているなど報告した。また吉村さんは職場のラジオ大阪で、大阪大空襲で大怪我を負った人々が６０年たった今でも苦しみ続ける現状を追ったドキュメンタリーラジオ大阪の番組を制作、「終戦６０年特別番組　足が生えてこなかった」が平成 17 年日本放送文化大賞近畿地区代表作品・日本民間放送連盟賞ラジオ報道番組部門最優秀賞受賞・第 60 回記念文化庁芸術祭ラジオ部門で芸術祭優秀賞を受賞した実績をもっており、今回の早坂先生を楽しみにされていた。

以下は、地元の小学生を中心に配布した小冊子からの抜粋

～～～～～～～～～　○●○　～～～～～～～～～

田辺に落された摸擬原爆のお話し

はじめに

太平洋戦争が終わる直前の、1945 年 7 月 26 日午前 9 時 26 分、大阪市東住吉区田辺地域の上空に一機の爆撃機があらわれて、現在の田辺小学校の北側のあたりに大型の爆弾を落しました。

　当時、田辺の人々の多くは空襲から逃れるために、疎開と言って農山村に引っ越していましたが、田辺に残った人々は大きな被害を受けました。昔の警察局の資料には、死者 4 人、重症 8 人、軽症 88 人、行方不明 5 人、全壊 203 戸、半壊 218 戸、罹災者 1302 人と記され、また戦後に大阪市がつくった資料「昭和 20 年大阪市戦災概観」には、死者 7 人、重軽傷者 73 人、消失倒壊戸数 485 戸、罹災者 1645 人と記録されています。

長い間、田辺の人々は「1 トン爆弾」が落されたと思っていました。ところが 1 トンどころか実際は 5 トン爆弾だったのです。それも本物とそっくりの形と大きさの摸擬原爆を使って、原子爆弾を落す訓練をしたのです。

この事実は、1991 年（平成 2 年）に愛知県の市民グループ「春日井の戦争を記録する会」の方々が国会図書館でアメリカ軍の当時の文章を調べてはじめてわかりました。田辺に摸擬爆弾が落された 11 日後に広島、14 日後に長崎の人々は、アメリカ軍が落した本物の原子爆弾によって、人類史上に残る、ひどくむごたらしい被害を受けました。

　私たちは、東住吉区田辺の地域が、広島・長崎の原子爆弾投下とつながりがあったことに驚きました。このことはそれまで田辺でも余り知られていませんでした。

　摸擬爆弾でお父様を亡くされた村田保春さんは、自費で犠牲者の慰霊碑を建てられました。私たちは毎年 7 月 26 日にその碑の前で集いを持って、摸擬爆弾の投下で被害を受けた方々を悼み、人々の平和への思いが高まることを願って、この悲惨な事実を多くの若い人への語り継ぐ取り組みを続けています。

摸擬爆弾が投下された時代背景

第二次世界大戦が終わりに近い頃、ナチスドイツが進めていた原爆開発に対抗して、アメリカ政府と科学者は原爆の開発に総力で取り組んでいました。ドイツが無条件降伏した後は、今度は日本が対象になり、科学者と兵器の専門家によって、日本の中のどこに原爆を投下するかが話し合われ、秘密任務の航空部隊がつくられます。そして、地上 9000 メートル前後の上空から原子爆弾を投下した時に、アメリカ兵が乗った飛行機が、爆発の衝撃に巻き込まれないために訓練を行う必要がありました。摸擬爆弾は、長崎に落されたプルトニウム原爆と形や重さが同じに作られました。重さ 1 万ポンド、直径 1.52 メートル・長さ 3.25 メートルの巨大なもので、カボチャのような形なのでパンプキン爆弾と呼ばれました。5 トン近い爆薬を充填した大型爆弾であった為、大きな被害をもたらしました。

7 月 20 日から日本各地で最後の最後の演習が始まり、広島に原爆を投下するまでの間に、38 地点で摸擬訓練を行っています。アメリカ政府は、広島・小倉・新潟・長崎を、原子爆弾を投下する目標とする命令書を、7 月 25 日に下します。田辺に摸擬爆弾が投下されるのはその翌日の 7 月 26 日のことです。そして、同じ日に、アメリカ・イギリス・中国が共同して、日本に対して無条件降伏を求めた「ポツダム宣言」を示しました。しかし、日本の最高戦争指導会議はこれを無視してとりあわず、8 月 6 日に広島に最初の原子爆弾が投下されます。
続いて、8 月 8 日に、5 地点で摸擬爆弾の訓練を行っています。この日にはソビエト連邦が日本に対して戦争を開始します。その翌日の 9 日には長崎に原爆が投下されました。8 月 14 日には日本の降伏が決定的となっており、また、アメリカ軍には原爆が一つもない状況でしたが、愛知県内に 7 個の摸擬原爆を投下しています、そして、1945 年 8 月 15 日、満州事変から 15 年、真珠湾攻撃から 3 年 9 ヶ月にわたる戦争は終わりを迎えました。
摸擬原爆は全国 44 の目標に、49 発が落されました。近畿では、7 月 24 日に神戸市内の四ヶ所と滋賀県大津市、7 月 26 日に大阪市東住吉区田辺本町（現田辺 2 丁目）、7 月 29 日には和歌山県有田市と京都府舞鶴市、8 月 8 日に福井敦賀市に投下しています。

田辺の摸擬爆弾と広島原爆のお話し

田辺の摸擬爆弾そして原爆とはどのようなものだったのでしょか。被害にあわれた方やその遺族の方から直接お聞きしたお話の一部を紹介します
田辺の摸擬爆弾のお話し

■山崎昇さん（山坂 4 丁目）は戦争後まもなく日記に田辺の摸擬原爆の様子を書きとめています。「私と母と一緒に全身に黒煙となった砂塵を浴びて防空壕の中に潜り込んだので、やったと助かった。（略）眼に何かの破片が入ったらしい女性が、ドス黒い地の流れた眼を両手で押へ、あちこち血で黒く染まった身形をして、唯、黙々と静かな早い歩調で歩いていった。担架に乗った外傷人も相当に運ばれていった」
■橘博さん（当時 16 歳・田辺 1 丁目）は柏原の工場で地雷の部品づくりをさせられました。「当時は情報を得る方法は新聞しかなく、さほど大した報道はされてなかったのに、広島に新しい爆弾が落ちたことを新聞で後で知って、食い違いが大きかった」と言います。
■村田保春さん（当時 28 歳）は豊川市の軍事工場にいました。お父さんの繁太郎（当時 55 歳）は田辺の家にいて、爆弾に気づき、防空壕に走り込もうとしたが、その途中で厚い土壁の下敷きになって圧死しました。2 階建ての家がつぶれて、大木が倒れて戦場のようでした。その頃、大阪には霊柩車がなく、お父さんの遺体を大八車に乗せて鶴ヶ丘駅東にあった焼き場に運んだといいます。
■保田利男さん（当時小学校 1 年生）は「爆弾や焼夷弾は日常のことだったけど、大きくなってヒロシマを訪れて悲惨さを知り、田辺の爆弾がその訓練だったと聞いて身震いした」そうです。
■海野修さん（当時小学校 2 年生）は B29 から仁丹くらいのもの（爆弾）がぽつんと離れ、何十秒か、ぐぉーんという、ちょっと今の時代で例える音はない、地獄に引きずられるような音がして気がついたら向かいの家の下敷きになっていました。誰も助けてくれず、自分ではって出てきたのは昼前でした。お母さんやお婆さんはガラスでけがしました。ケガの重い人が田辺小学校に寝ているというので行ってみたら、ケガ人が講堂で並んでおり、それが女性と子供ばっかりで、血みどろの上に、爆風で舞い上がった白い埃がべっとり付いて、まるで映画に出てくる幽霊みたいな状態でずらっと 50 人くらい並んでいました。みんな唸っていて、「痛い痛い」と言う人もあれば「助けてくれ」と言う人もあるという状態だったとのことです。
■石橋忠男さん（当時 9 歳・北田辺小学校 4 年生）は、家の前のガラスが全部割れて破片が手首に当たって、未だに手首に傷が残っています。
■飯田清和さん（現住吉区在住）は 9 歳の時、広島で原爆の被害にあいました。爆発地点から約 8 百メートルにある小学校の校庭で朝礼中の出来事で、奇跡的に命は助かりました。しかしその後、避難先で「ピカドンの子」といじめられ、原爆の被害者であることを隠してきたといいます。大阪に移り住んで、テレビで田辺の摸擬爆弾のことを知り驚きました。広島で亡くなった二十四万七千人の冥福と世界の平和を祈り、今は悲惨な体験を語りいでおられます。飯田さんが当時のむごい光景を書いた文集の一部を紹介します。
「助かった数名の生徒達は建物の下敷きになった友達を救うことも出来ず、ただ泣くばかりでした。押しつぶされた土間の中には先生の姿は見当たりません。（中略）急に激痛を感じたとき、私の衣服は真っ赤に血に染まっているではありませんか。流れる血は止まる事を知らず、にぶく光って吹き出てきます。左腕は肉を深くえぐられていて骨さえ見ることが出来ます。口からも血が出てきます。今まで唾とばかり思っていたのが血であったとは・・・。足にはガラスが突き刺さり歩くのにずいぶん痛みを感じます。一歩進むたびに貧血と痛さのために今にも気が遠くなりそうでした。校舎に眼を向けると四十五度に傾き今にも倒れかかっているではありませんか。屋根は全部飛び、無惨にも朝礼をしていた生徒達の頭上に落下しているではありませんか。落ちた屋根は無常にも多くの生徒の生命を奪っていました。瓦にはまだ乾いていない血が不気味に光っています。白い手はみんな開いていて材木の間から見られます。この様は一生忘れる事ができません。（略）」街の中で飯田さんがみた光景は次のようでした。「道路の両端には黒焦げの死体、ぶくぶく膨れ上がった死体がずうーっと続いているではないか。中には子供も女学生もいた。まだそうして分るのは良いほうで、全く男か女か分らないのが多かった。用水槽の中では数人の男女が水だきにされて死んでいた。その膨れあがった死体を一人一人丁寧にしらべている将校がみられた。彼の母か、あるいは妻を捜しているのであろう。中には黒焦げの小さい死体に抱きついて泣きわめいている女もいた。黒こげの小さい死体を抱いているのもあった。（中略）いつやってくるかもしれない原爆症におびやかされながら・・・私たち被爆者の恐怖心はまだまだ絶える事を知らず続くことだろう」

～～～～～～～～～　○●○　～～～～～～～～～

広島に原爆を落とす為に、実地の飛行訓練を行っていた。「アメリカには余裕があったんだねぇ」の早坂先生が一言。大阪の田辺に使用された 5 トン爆弾が、広島の悲劇に繋がるとは･･･武器は使う為に開発されているのだと痛感。

原爆瓦が語る一瞬で消えた広島の街と人々

そして、近くにある**第 3 号絵碑**　広島 YMCA の絵碑の前を通った。繁華街で人通りの多い道路の傍に憤然と、絵碑は建っていた。一瞬にして周囲のビルが真っ赤な炎に呑み込まれていった惨状を描く絵や、黒焦げの市電を描く絵には**「8 月 10 日革屋町電停付近。爆風で道路脇に飛ばされ、黒焦げになっている電車。めくれ上がっている線路。乗客も**

電車と共にふっ飛び、焼けただれて死亡した様子。電車後方の瓦礫の中には真っ黒な死体が数体ころがっていた」と書き添えられていた。広島 YMCA の建物がある場所は、戦前は済美学校という明治 5(1872)年創設の開成社を前身とする陸軍偕行社（陸軍の互助団体）が経営する、軍人や高級官僚子女の為の学校があった。原爆により多数の教職員や生徒が死傷、同年廃校となった学校の跡地に慰霊碑と峠三吉の作品「墓標」が背面に記されていた。その日は祭壇が設けられ綺麗に盛られた花があり、慰霊祭とシンポジウムが行われていた。そして、慰霊碑の裏の道路に面した柱には原爆瓦を集めた楕円形のモニュメントがあり、次の様に書かれていた。

■ **原爆瓦について**1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分、原子爆弾の炸裂により、爆心地の温度は摂氏 3000 度から 7000 度の超高温になりました（鉄のとける温度は 1500 度、太陽の表面の温度は約 5700 度です）熱線は爆心地の住民を焼き殺し、住居を炎上させ、屋根瓦をとかしました。この瓦には、表面がとけてできたガラス質の粒があり、原爆の熱線のあとをはっきり示しています。爆心地直下で生活した人々も、この瓦と同様に焼かれ、とかされ、殺されました。泡状に表面が焼けただれた瓦は、この人類史上未曽有の惨禍を語りかけています

絵本作家が見た逃げ惑う人々に蘇った被爆プラタナス

午後は、2 台の車に分乗して、絵碑巡礼に回った。**第5号絵碑**、広島女学院・中・高等学校の壁には、爆心から2キロの自宅で被爆し今は豪州で絵本作家として活躍する森本順子さんの絵碑を挟んで早坂さんと事務局次長の土居さんの説明を聞く。

勝手知ったる校庭のプラタナスで土居さんが門の鍵をあけて、生徒のいない天満小学校の校庭で**第6号絵碑**を見る。爆心から 1.2 キロ、校舎吹き飛び多くの犠牲が出たが、4 本のプラタナスは爆風で傷つきながらも芽吹き、戦前戦後の子供たちの姿を見守り続ける。一見、青々と茂っているように見えるが、幹に洞ができて根に養分を十分に吸い取る力が無いためか、近くで見るとどの葉っぱもまだらに茶けっていている。

紙芝居形式で絵碑が語る 9 枚の地域の歴史

第 7 号絵碑は福島生協病院内科クリニック駐車場に、4 つの石、被爆した天満神社と宇品駅プラットホーム礎石に 7 つの絵に添えて以下のような文章が添えられていた。**ピカドン**：**1945 年（昭和 20 年）8 月 6 日午前 8 時 15 分原子爆弾が広島に投下されました。街は一瞬にして廃墟と化し、強烈な熱戦と爆風、放射線が数十万の人々の生命を奪い、生き残った人々も今もなお心と身体の被爆に苦しんでいます。閃光：いつものように家族の者が、仕事や学校に出かけた静かな朝でした。突然目の前が真黄色になり、シュウと音がして、ごう音と共に大きな衝撃をうけ気を失いました。ピカッと光ってドンと音がするまでにかなり時間があったような気がします。下敷き：真暗闇の中で気がつくと家の下敷きになっていて、腹の下でカアちゃんと子供の泣き声がしました。息苦しく、倒れた柱の下で力の限りもがきましたが、身体の自由がききません。声を限りに助けを求めました。逃げる：あちこちで火災がおこり、その炎に追われるように逃げました。全身焼けただれ、手の皮ふが、ボロきれのようにたれ下がり、目はつぶれ両手を前にだして人々は、「天に焼かれる」と、うめきながら歩いていました。それはまさに“地獄絵”でした。火葬：被爆した人々の遺体が、焼あとのあちこちで火葬されました。兵隊さんたちがたくさんの遺体に重油をかけ焼いていました。家族の人たちが悲しみにくれながら身内の人をやく白い煙も、しばらくの間絶えることはありませんでした。消えた風景：あの日の朝、貧しくもあたたかい長屋と、元気な子供たちの声が消え、福島川桜土手の緑や水辺も姿を消してしまいました。「私はあの日生き地獄を見たのです。私はこのことを忘れることはできません。再びこのような核兵器が使われたら人間は絶滅すると思います。今も原爆症は、生き残った被爆者とその子供たちの命を奪いつづけています。ヒロシマの若者は人類最後の人間になりたくないと世の中の人々に訴えています。この訴えが世界の人々の声になることを望みます。金崎是」**

その碑の近くには、「福島地区原爆被害者慰霊の碑」があり　**天を抱くがごとく　両手をさしのべし　死体のなかにまだ生きるあり**　と刻まれた大きな石碑がどっかりと建っていた。前には水が供えてあった。

けが人の群れに、建物疎開作業中の子供らの悲劇

車で暫く走ると、野球で有名な広陵高校の構内に車で乗りつける。そこには第 2 号碑の 2 つの絵碑があった。**「廣島に原爆が落ちて本当にひどい有り様になった　何百人も火傷をおった人たちの行列を目にした御幸橋　一列に並んで倒れていた　欄干石　南側のそれらは　川底に落ちていた　川の中ほどで　思わず立ち**

止まって　僕は眺めた　野火のように燃える川上の西岸　激しく燃えていた家々　天まで昇っていった　黒い煙　深くは考えない　愚かな若者だった僕　それでも　生まれて育った　廣島の町　「廣島の町が死による」僕は悲しかった　「若いいのち」　あの日の朝　建物疎開に出ていた子たち　焼かれて　ただれて帰ってきた　暁部隊のトラックに乗せてもらった子らもいた　あの後すぐに多くの子らが　死んでいっただろうなぁ　楽しい夢も　明るい未来も　あっていいはずの　若いいのちだったのに　君らの叫びと祈りは世界に伝える　安らかに　眠ってほしい　松島圭次郎」爆心から2.2キロの御幸橋から見た惨状が描かれていた。

地獄絵さながらのあの日の広島

市街地に戻り、**第8号絵碑**がある広島県歯科医師会館の前に着いた。原爆ドームのスケッチを続ける語り部として有名な原廣司さんの爆心 1.2 キロの富士見町付近で目撃した瀕死の被爆者や遺体が並ぶ様子が灰色と黒との濃淡の絵の下に**「水をくれ」「水をくれ」と私に言った。学校から帰る際、先生から「水を飲ませたら死ぬ」と注意があった。私はその場を逃げるように足早にさった。手を合わす姿が今も忘れられない。」「死体の上に焼けたトタンが被せてあった。付近には収容されない死体が多く放置されていた。なんたる光景であろうか。一日前までは戦時下であってもみんな家族があり、元気に生きていたのに・・・」**

そこに先生のメッセージが添えられていた。

世界がヒロシマを忘れたとき、再びあの日は繰り返される

あの日をみつめてください　昨日を忘れては明日は見えない。昭和20年8月6日の朝、この場所で何が起こったか。写真の一枚もなく、ああ、どんどん忘れられていく。どうか、目をそらせないでください。この絵は、あの朝、この地で生き残った被爆者が渾身の力と万感の思いで描いたこの場所の眺めです。どうか忘れないで！日本の人たちよ！　世界の人たちよ！二度とこの風景が地球上に繰り返されないよう　この絵を見つめてください。早坂暁

記念写真を撮り、車ですぐのビルの二階に上がると、大きく開かれた門にベルがあり、その傍に**第4号絵碑**の爆心から 1.5 キロで建物疎開の勤労作業前の注意事項を聞いていた旧中学3年生70名が原爆という巨大な溶鉱炉に投げ入れられたような惨状が描かれていた。台座の石柱石は、広島電鉄の路面電車軌道敷の被爆石、あの日を体験した物言わぬ証言者が絵碑を支えていた。日本福音ﾙｰﾃﾙ教会の牧師さんも早坂先生に挨拶に来られ記念写真を撮った。

早坂先生と原爆投下61年目の広島を巡って

この後、原爆ドームの傍を車で通り抜けたが、平和公園を市民団体が旗を掲げたりと反戦、平和へのシュプレキコールが響いていた。ここは広島、今日は8月6日、広島が原爆に襲われてから丁度61年前、9つの絵碑を巡礼し、焼け落ちる広島の惨状を目に焼きつけながらも、生きることを諦めず、小学校の校庭で緑の両手を精一杯広げていたプラタナスが再生する姿がたくましかった。

北朝鮮の核実験実施は脅威だが、北朝鮮の孤立無援の姿はポツダム宣言を無視した日本の姿に重ならないだろうか。核は持たないと叫びながら日米同盟による大国主義アメリカの核の傘の下に寄り添う日本に何が言えるのだろうか。銃の脅威を知りながら、銃を捨てることが出来ないアメリカの矛盾は核を保有することにも繋がるのではないだろうか。銃を持ち続ける社会は、銃の恐怖に晒されている。核を保有する国際社会は、いつも核の恐怖に脅えなくてはならない。靖国神社が問題視されるが、靖国に命を捧げさせた国の責任は棚上げされたままだ。その矛先にはいつも国民に向けられている。昨年は熟塾では大阪大空襲について考えたが、ここでも多くの市民が犠牲になっていた。そして、大阪の田辺に落とされた5トン爆弾が、広島への原爆投下の実地訓練であったとは・・・。兵隊さんは武器を持っていたが、広島で犠牲になった一般市民は何ら武器をもたず、無力な赤ん坊まで犠牲になった。子供らを、未来を守れず充分な慰霊もせず戦後経済復興のみに走ってきた日本に今大きな亀裂が表面化している。日本は、平和の礎となった犠牲者に報いる国となったのか。教訓は活かされているのか。

文字を刻むだけの碑ではなく、原爆の脅威の語り部として、絵碑は視覚的に鮮烈に訴える。色あせない陶板に焼き付ける事は、教訓となるべき絵を保管するだけではなく、広島の記憶として街角に拡散させる。地道で大切な活動だが、早坂先生をはじめ、事務局の方々の積極的な活動が一つ一つ形となり、後世に伝えられる意義は大きい。官に頼らず民の力で資金調達から受け入れてもらえる場所の確保や地域の人々の協力等様々なご苦労はあるだろうが、被爆者の高齢化に伴い伝承の手段として、街角の語り部の意義もますます大きくなることだろ。

9つの絵碑を早坂先生と巡礼した貴重な61年目の夏の記憶を、大切にしたい。無力な一市民に何が出来るのか、私は、犠牲になった人々の思いに寄り添い世界平和を願いつづけることではないかと考える。犠牲者の死を無意味にしてはいけない。この悲劇を与えられることも誰にも与えてはいけない。不戦の誓いの憲法第九条がなし崩し的に崩されていくような気配さえ有る中、戦争の無意味さをもう一度確認するたに、広島の記憶は存在する。相手が武器をもっているからと、自分も武器を握ると、その武器で相手や身内を刺し殺すことになるかもしれない。武器を持つ相手に武器ではない、思いやりで説得はできないのか。ましてや、核には核を保有してという最近の安易な政府要人の言葉には背筋が凍り、底なしの嫌悪を感じる。

広島に行かれることがあれば、あの日の惨状を語る街角の絵碑にも出会い、犠牲者の思いに触れてほしい。絵碑は無言ながら雄弁に、色褪せることなく鮮明に被爆者に代わって「もう二度とあの日を繰り返さないでくれ」と語りかけてくるだろう。（原田彰子）

被爆者が描いた原爆の絵を街角に返す会
広島 YMCA 国際コミュニティセンター内
〒730-8523　広島市中区八丁堀7－11
TEL　082-228-1151　FAX　082-211-0366
郵便振替：広島 01300-0-70535　一口千円より